



大倭出版局・大倭紫陽花邑

平成27(2015)年
9月号
通巻541号
毎月23日発行
(題字 矢追日聖)

★発行日 平成27年9月23日
★発行所 大倭出版局
〒631-0042 奈良市大倭町1の12
☎(0742)44-0015
★印刷 大倭印刷製
★定価 1部 250円
年間購読料3,000円(送料共)
★郵便振替 01050-6-67002
大倭出版局
URL <http://www.ohyamato.jp>



夕方、南紀・白浜海岸にて

奈良市 和田 保さん撮影

平成5(1993)年9月23日 月次祭法話より

お彼岸さん

法主 矢追日聖 (満81歳)

お彼岸は一つの習慣

今日はお彼岸さんの中日ということになっておりますので、お墓参りに行っておる人も多いでしょう。今朝テレビで、京都の大谷さん(※京都東山五条にある大谷本願)のことをニュースでやっておりました。何千のお墓があるのかなあ。あそこへ花と水を持ってお参りをしている。お墓に自分のご先祖さんが居てはるのか居てないのか、どう考えているのかなあと思いつつながら、テレビで観ておりました。お彼岸さんの間にお墓参りするというのは、仏教のいろんな行事の一つとしてのもので、仏教を信じておる人にはいいんやけれど、宗教的に相違があれば、お彼岸さんなんて別に意味の無いことやと思つておるんです。

誰でもお墓参りや、神さんや仏さんを信仰して幸せになれるのならば非常にありがたいことで、まあ間違いではないと思つています。

靈魂の働くところ

その時にね、靈魂について皆さんどういふような捉え方をしておるのかなあと思つておるんです。死んだ人の靈魂と、肉体を持って現在生きている人間との関係が大事やと私は思つておるんです。

一般的には遺骨のあるお墓にお参りをします。例えば墓石には、矢追家先祖代々とか中村家先祖代々とか川端家先祖代

々と書いてある。普段は何もないけれども、家族の人がお参りに行った場合に、矢追とか中村とか川端という、墓に書いてある文字を通してご先祖さんの霊魂が瞬間に働いて出てくるんです。

そういう意味ではねえ、墓というのは非常に大事なところなんです。それじゃあ、墓が無かったらどうすんねんと言う人もおるんですけども、無かったかて別に構わないんです。造らんでもバチは当たりません。

自分の親が死んだ時に、例えばバックでも何でもよろしい、それを拜んでもいい。その人の持つておった品物にでもその人の霊が働いておるんです。だから、ご先祖さんの宝物とか衣服とか保存しておいたほうがいいと思うんです。

私個人の場合ですが、この白いヒゲ、全部貯めています。私が死んだとしてもこの一本のヒゲを見た時に、私が出て行くはずなんです。この足の爪と手の爪も、切った爪は全部自分で入れ物に保存しています。爪を切ってパツと放しませよんよ。こんな私だけやら真似せんといてや。(笑)

自分自身のこの肉体の中に、先祖代々から受け継いだ血液が流れているんです。現在の我々の肉体が、ご先祖さんと縁が一番深いところなんや。そういうようにご先祖さんと自分の因果関係をよく知ってほしいと思うんです。

死んだら終わりでない

新聞には、沢山の人の名前が載っていますけど、印刷されているあの文字にでも、一つの霊とか霊魂がみんな働いているんですよ。またいだり蹴ったり、またその新聞紙でいろんな物を包んだり汚して放したりしますけどね。位牌やったら、蹴ったらあかん、踏んだらあかんって、ちゃん

と仏壇の中に入れて拜んでおるんやわね。

私の母親の場合は、その位牌一つ見た時に、パツとその人の生きてる時の姿から、死んだ時に着ていた着物まで見えましたよ。その点はもう非常によく分かる能力を持つておって、相談に来た人をびつくりさせるような例が沢山ありました。

位牌には戒名の裏にたいいてい俗名が書いてますわね。その書いてある字だけで、死んだ人のことが分かったんです。死んだ時の状況とか、また死んだ世界で苦しんでおるんやったら苦しんでおるようなものが出て来る。

ある相談者の主人をパツと見た時の話やけれど、生きていた時に複数の女の人を苦しめていたようで、その主人が出て来たのと同時に、苦しめられた女の人の霊がズラツと出て来るんて。

だから夫婦であってもそうなんですよ。婿さんと嫁さんと一緒に生活して接触しておると、霊的にもやっぱり繋がりを持つてきておる。自分の嫁さんが死んだって、自分の肉体の中には嫁さんの霊が働いておるんやね。

私は母親と一緒に生活してたから、日々そんな例を耳にしておったわけです。

結局、霊というのは自分にもっとも縁のあるところへ出て来るんやね。我々の目の前にいろんな訳の分からん、かすかな電波があるんです。これテレビみたいにNHKにチャンネル合わせたらNHKが出る、一つ回したら朝日放送が出るような、霊魂を見るテレビみたいな機械があればええんやけれどもね。我々が分からないだけのこと、世界中の電波がこの目の前にあって、自分と霊界が繋がっているんです。

身近なたとえで考えた時に、自分には目に見えない心というものと、そして目に見える肉体とがある。心に悩みや心配事が多くなってくると、肉

体にも影響が出て来る。ぼちぼち胃の方がややこしくなると、しまいに穴が開いたり神経衰弱になったりする。心と肉体の関係が不離一体なんです。この心と肉体の表裏一体の関係が、ご先祖さんと自分との関係にとっても良く当てはまります。宇宙の真理というものが、心と肉体との関係に働いているように、ご先祖さんと自分との関係にも働いているんです。

自分の肉体がお墓

自分の心の中に悩みを持たない生き方と健康に心がけて、何に対しても当たり前と思わずに「ありがとう」という心持ちで暮らしていくことがご先祖さんに孝行をしていることになるんです。

また、この世に執着しないでいろいろな人と仲良く暮らしていくことが、ご先祖さんを供養していることになるんです。

別に自分の家の中に仏壇が無くて、お墓が無くて、「自分の肉体が仏壇でありお墓である」という気持ちで毎朝祈ることができたら、形としての仏壇もお墓も要らないんです。相対的に考えて位牌やお墓に拜んだりせずに、自分とご先祖さんは全部一体なんやという気持ちで拜んだらいいと思います。

けれどもやっぱりなんか知らんけど、死んだ人は自分と遠く離れたところにいるような感じを持つ。仏教であれば十億人に、ご先祖さんが行つてるとか、仏さんになって阿弥陀の世界にいるとか、そんな物語が残っておるから、自分とは遠く切り離して考えるんやね。お盆になったらご先祖さんが遠いところから帰ってきたからお迎えする、お盆が過ぎる頃送り出すと、そういう習慣の人が多いんやと思います。

自分の修養こそが先祖供養

般若心経というのは、この世の中に執着を持って喧嘩したり悩んだりするのは「色」の世界であって、形の物を中心として考えるから悩みというのは出てくるんやと。やがてはみんな「空」になるんやと思えたら腹立つことも少なくなるやろと、そんな意味のことを説いてはるんやな。

たしかに修養が要ります。生まれながらにみんな個性というものを持つておるから、何でもないことで腹が立つこともあるんやけどね。煩惱の悩みは放して、生きている間に「空」の世界になりなさいと。また生きている時の宗教の相違も、例えばクリスチャンの人であればキリスト信仰しとったという気持ちがあるだけであって、霊の世界では仏教も神道も関係ないんです。

私もあなた達も百年か二百年以内には一人残らずこの肉体は無くなるんや。今この自分の肉体も所有している物も、全て借り物。死んだらこの世に置いていくんやで。

ところが、この世のことに執着しすぎて欲深い人は、死んでから自分で自分を苦しめている場合が多いんやね。死んで終わりなら楽なんやけれど、その苦しみが子孫やこの世で関係した者に影響を出してくるんです。子孫を苦しめたいというわけではないんやけどね。

それに対して、生きている人間のほうから仕掛けることができる場合が多いんや。ご利益をもらおうというのではなく、自分が生かされていることに感謝する気持ちが大変なんです。それがうまくできた場合には、お互いみんなが幸せにいけるんです。ご先祖さんのご機嫌が良くなって喜ばはるから、自分の肉体や心にも喜びが出て来る。ご

先祖さんのご機嫌が悪かったら自分の家庭の中もさっぱりうまくいかなくなるんです。

こうして話をしていますと、言葉としてあなた達の耳に入り、肉体を通じてご先祖さんの靈魂にも全部聞こえておる。あなた達が心の中に悩み事を持たんような人間になったら、ご先祖さんはみんな喜ばれます。

一番身近な事では、家族同士が毎日仲良く暮らす。職場の人や隣近所とかあるいは人間関係の親睦をはかって、その日その日を喜びのある自分にしていく。いろいろ自分の心の中に腹の立つことや情けない気持ちもあるけれども、これもパーと放つてしまおう。

やがてはみんな「空」になんねんから、生きている間みんな仲良くしようやないかというような気持ちで、日々自分を楽しんで暮らしてほしいなあと思います。(文責・編集部)

特集 戦後70年の夏に

インドを緑に変えた偉人

— Green Father 杉山龍丸伝 —
「Go! 孤独」を抜粋

福岡県筑紫野市 杉山満丸

昭和10年(1935年)7月、龍丸の祖父・杉山茂丸が、さらに、昭和11年には父・夢野久作が亡くなります。龍丸は、三人兄弟の長男として一家を背負う立場になります。そして、彼に遺された祖父と父からの言葉は「杉山農園の土地は私物化せず、当初の目的通りアジアのために使え」というものでした。そこで、龍丸は、給料がもらえる土官学校へと進学します。

土官学校卒業後、龍丸は指示により航空技術学校へ進学します。航空技術学校は、航空整備術校を育てるための学校で、龍丸は第1期生でした。

航空技術学校を卒業した龍丸は、満州に赴任します。そこで待ち構えていたのは、突然エンジンが止まって墜落する飛行機です。龍丸は孤独のなかで苦悩します。第1期生なので、相談する先輩はいません。寝る時間を惜しんで解決方法を探し、戦闘機の設計者にも直接手紙を出して指導を仰ぎました。ゼロ戦の設計者の堀越二郎さんとは、生涯の友人となりました。

その後、部隊はフィリピンへ移動します。龍丸は、魚雷攻撃を受けた際に乗船位置(上甲板に近い位置に乗船すること)が部隊の生死を分けるかも知れないと考え、慣例を破り部下と共に船でフィリピンに向かいます。平時の定員の二倍に改装された船には、およそ4000名の兵士が乗っていました。36隻の船団はフィリピンを目前に、アメリカ軍潜水艦の攻撃を受け28隻が撃沈されました。龍丸が乗っていた船も明け方に撃沈され、南国の照りつける太陽の下14時間漂流し救助されましたが、部隊の三分の一の方が戦死しました。

フィリピンに上陸後、部隊を立て直しフィリピン中部のネグロス島・ファブリカ基地へ部隊は移動します。龍丸の部隊は陸軍で最初に特攻機を出した基地となり、レイテ戦にも参加。工夫しながら最後まで戦闘機を飛ばし続けた龍丸は、ボルネオに脱出し、そこで、アメリカ軍の機銃掃射を受け片肺貫通の重傷を負い、神経痛に生涯悩まされる体になってしまいます。龍丸は「トップに立つ人間は孤独なのだ」とよくいっていましたが、そのなかでも、戦後、「戦死した自分の部下の家を一軒一軒回って、遺品を届けて亡くなった状況を伝える旅ほど辛いことはなかった」という言葉が心に遺っています。(ネット上に書かれたものです。 http://www.jid.or.jp/artdec/artdec52/artd52-key_note7.html)

第321回大倭会文化行事報告 平成27年6月21日

偉大なる実践の人を訪ねる

賀川豊彦と久宗壮について

岡山県真庭市 湯浅 芳郎

賀川豊彦(明治21年・昭和35年)は熱心なキリスト教伝道者で、極貧の人々との生活を通じ救済活動の実践、生活協同組合の創始、平和運動家として世界を駆けて活動した。そして昭和22年から5回もノーベル賞候補となった。著書にベストセラーとなった『死線を越えて』がある他多数の社会改革についての著作を残す。

賀川豊彦記念館は、神戸三宮駅より東へ歩いて10分。写真や遺品によって、生い立ち・社会運動・医療・農民運動・共同組合運動・平和運動・世界連邦などの活動分野別に説明いただいた(写真下)。記念館はその遺志を継ぎ、現在も学習・ボランティア活動の拠点となっており、恵まれない方の支援活動等を行っておられる。

後日、著書『山水大観』の「瀬戸内海美論」を読むと、瀬戸内海について、自然が完全に調和していること、多島海的美、海の恩恵、「島々を伝い歩くと、星から星へ渡り行く気持ちがある」と表現され、話題は倭寇、平家の哀史に、さては地中海のバイロンの「海賊の詩」、モーパッサンの「水紀行」に及ぶ。旅を愛した優れた文学的才能の持ち主でもある。

さて、ここからは私のふるさと岡山の「立体農業」の実践者、久宗壮(明治40年・昭和60年)について記すことにしたい。小生の生れた真庭市落合から国道181号線を津山市に入ればすぐ「久宗農場バス停」がある。この地・坪井に久宗家がある。

昭和5年、久宗壮は賀川豊彦の津山での講演を聞き、門下となり指導を受ける。そして自然的な農業を始める。これは立体農業と言い、米麦・野菜・果樹栽培・畜産・酪農を組合せ、あらゆる動物、植物を利用して土地を立体的に機能的に使用する循環農法である。そして「世界の食糧問題」「農村の苦しみ」「過疎化と減反」「農薬公害」「食品添加物問題」、これらを深く分析・検討し「神を愛する精神」「土を愛する精神」「隣を愛する精神」を基本とし「明るい農村の建設」を提唱し実践する。ご夫妻で地中海など海外の視察にもたびたび出かけられている。



考えてみれば、かつて人類は、縄文時代の私たちのように「森の住人」として、この方法で生き延びてきた。

また、現代の大量農業使用大規模単一作物作りは破綻の可能性が強く、この対極として次世代の農業の先取りではないかと考えられる。

小生も無農薬有機米・野菜作りを少しやっている。暑中見舞いなどで、近況を報告すると「なんと贅沢な生活」とか「健康で充実した生活で」と返信をいただくが、ほんのすこし昔の時代に戻っただけだと思っている。一農家で少量多品種栽培は大変と思う。共同体方式が将来の形と考えられる。

岡山県久米郡久米町(現津山市)に生れ、岡山県立高松農業学校卒業後、倉敷の大原農業研究所(大原美術館の創立などで有名な大原孫三郎が大正3年創立。現在は岡山大学資源植物科学研究所)に勤務、昭和4年帰郷後、青年学校校長歴任、昭和25年より自営農業を始める。『日本再建と立体

農業』『生命の樹に賭ける』など詳しい立体農業の進め方の著書を多数記す。

師・賀川豊彦が、その実践生活を讃えた詩碑が久宗家の庭にある。小生の生れた河内村(現在、真庭市河内)から、わずか車で15分のところ。先日、久宗家を訪問し詩碑を撮影させて頂いた。

久宗壮氏におくる

昭和三十年八月十五日

美作の実作り

美作の



椎茸作り 栗作り
山美しく 若葉栄え
人に見捨てし 山里も
乳と蜜とに 蔽われて
今楽園と 化して行く

くるみひらたけ 山羊細羊

火山地帯の 赤土を

くしくも開く パラダイス

美作実作り 桑いちご

赤い血の色 ルビー色

星も羨やむ 愛の国

月も太陽も 美作の

生命の森に 手を貸せば

実作り美作 愛の国

文化行事は、ただ単に参加するのではなく自分の身近なことを通じて学ぶことにより、楽しみや感動が倍増する。岡山にも、法然の生家(誕生寺)、栄西の誕生した寺、片山潜生家など、まだまだ訪問したいところが沢山ある。奈良より故郷に帰り10年。まだまだ再発見がありそうです。

大倭千一夜

(其の二十)

昭和41(1966)年5月23日発行『大倭新聞』第20号より再録

龍の人間転生(上)

法主 矢追 日聖(満54歳)

——徒然なるままに心霊のくさぐさを喋る夜ばなし

変わった男

ああ、その話かね。人権問題になるかも知れないが、まあ、話として聞いてくれたらよいだろう。私が大阪の方へ布教に出ている頃である。四十半ば過ぎた一見精薄らしい男が私の所へ来て、「お山(大倭)へ連れてほしい」と喰い入るように哀願する。いつも国民服を着て蒼白な顔色、両手は寒さにふるえているように震わしている。煙草に火をつけるのが一苦労だね。

坂上登(仮名)というこの男は夏冬とわえず、近所の井戸や水道でたえず水をかぶっていて、かなり世間さまに迷惑をかけたらしい。聞けば、体の中が火で焼かれるようになるので辛抱し切れず、水の所へ走るといふことらしい。ところが、面白いことに六根清浄や大祓いの祝詞、観音経、般若心経、法華自我偈などは実によく暗誦していて、夜といわず昼といわず大声で唱えながら水あびをするのだから、近所はたまったもんじやない。お山であれば土管の中でも寝るからと言ってつきまとうので、親族の人達とも相談したうえ、とうとう私の方がコン負けして連れて帰ることになったんです。近所の奥さん連は声を揃えて喜んでくれました。ね……かなり困り果てていたらいいんです。

昭和二十六年八月の暑い日の晩でした。富雄駅から歩いて大本宮まで帰るのですが、道のりは五*程あるんです。振返ると彼は立止まっています。

よく見るとね、歩く方向を定めてから両眼を閉じ、おもむろに右足を出せば右手を出す、ゼンマイ仕掛けの人形が歩くようにね。左足左手も同時に結びつけたように動かしながらついてきて、五十歩程歩けば又立止まってねらいを定める。これには驚きましたね、牛の頭に頭突きをかましたと誰かが話してたことを思い出して苦笑しましたね。これはこれは大した大物を拾ったわいとひそかに思

いながら長い夜道を無事につれ戻ったんです。実は登の小学校時代は、優秀な頭の子供だったようです。話によれば全国当選の衆議院議員の名称を、新聞で一度目を通すだけで全部暗誦したということなんです。ところが不幸にして十六歳の時、嗜眠性脳炎に冒され、九死に一生を得たものの、哀れにも、精神的欠陥の不具者になったようです。片方の眼球は引きつっているし、右と左の運動神経はアンバランスで異様な動作で歩く、言語も少々は障害がある。色気は皆無であったが、食気は旺盛で、時には近所の留守宅に上がり込んでおヒツの御飯を手でつかんで食べたこともあるらしい。煙草が好きだったので、火をつけて渡してやるが、予備に持たせるものなら尻から煙が出るほど次々と火をつけて吸ってしまふ。

政子と登は名コンビだね。演技は名人級でしたよ。私は毎日のように外に出ていたんですから鈴月ならでもともしゃないと、時折昔を偲ぶことがありますよ。

に精神分裂症の政子(三一歳)と登だけで、僅か四人でした。他は全部子供でしたが、家麻呂(一四歳)と今は四人の母になっている良(一四歳)の二人には、家事のことやら農作業などかなり負担をかけたものです。その他に、今バンコックにいる輪彌美(一五歳)が最年長で、つぎが美寿紀(一二歳)、昨年十月に亡くなった節子(一二歳)、それに志津女(五歳)と盛賢(三歳)の合わせて七人が、この頃におった子供です。この時が大倭一門では、一番小家族だったんです。

このような家族の中へ、世にも稀な男、登を加えたのですから、日々の暮らしは、それは大変だったんですよ。

政子と登は名コンビだね。演技は名人級でしたよ。私は毎日のように外に出ていたんですから鈴月ならでもともしゃないと、時折昔を偲ぶことがありますよ。

連れてきてからですか？ それが又奇妙なんです。登を連れて帰った晩はかなり暑かったので、行水をさせたんです。無論、お湯ですよ。全然、水を使わないのに喜んで体を清めていたので、異様な感じがしたんです。長年の間、夏といわず冬といわず日に何十回か水浴びをしていた登が、水はいらなくなったと言ったからです。

何か妙な雰囲気かただよってくる心配がするの、よく見ると、登の肉体は大きな鱗で包まれていて、それがみるみる巨大な龍体に変わっていった。「あつ、登は龍の人間転生か」と思わず口に出した時、と同時にその姿は消え去ったもの。登にもどったんですよ。

そりゃ凄いですよ。大倭へ来てからは一パイの水も浴びなくなりました。(続く)

※第21号は6月15日付発行で変則。大倭千一夜の番号も乱調なので修正して再録。

龍の正体現す

その頃の家族は、大人では私と妻の鈴月、それ

大倭千一夜

(其の二十二)

昭和41(1966)年6月23日発行『大倭新聞』第22号より再録

龍の人間転生(下)——死を予告して 法主 矢追 日聖(満54歳)

——徒然なるままに心霊のくさぐさを喋る夜ばなし

四ヶ月で解脱

登の本霊は、えらい芝居を打ったもんです。とうとう大倭へ連れて来ましたからね。浄化向上をめざして……。これは一寸説明しても普通の人には分からないよ。

死地を求めてここにやってきたのだから、日夜の暮らしの方法として、登に「気がむいたら齋庭の草刈をするように。もし仕事がいやなれば、お経でも唱えておれ。登が拝んでいる時は何の仕事もさせないから」と約束をした。

それをよいことにして、食事のほか、登はヒモロギの前の下の段に土下座して大祓いの祝詞と観音経を最も多く唱えていた。時折、からかってもみた。観音経を途中から言わせても、終わりから逆に言わしても、それは完全に一字一字たしかに記憶しているのには驚いた。夏は過ぎ、秋も暮れかけて師走の風が近づいてきた。

生駒嵐が身にしみる十二月十四日、私は家庭教化のため出かけようとすると、部屋に横たわっていた登がヒヨロヒヨロと見送りに出てきて、「ターさま(法主)、えらい代物が舞込んできましたなア、苦勞をかけます。鈴月カーさま(側にいた)、もう死にますワア」と藪から棒に言い出したんです。秋の始め頃から少々衰弱していたのですが、何処が悪いという訳でもなかったんです。「登よ、死ぬには一寸早すぎるよ。正月もじき来ることだ

し、登の好きな餅でも食べてからにしたらどうだ」「それでは、そうゆう風にしまじョウカ」という声をあとにして出かけたんです。

明けて十五日の朝でした、月次祭ですので大倭神宮へ詣ろうとして、鏡池の堤にさしかかった時、登がヒヨロヒヨロ出てきて、「とても正月までは待てまへん。やつぱり、もう死にまっさー」と。このあと、家麻呂から子供達一人一人の名前を言ってお礼とお別れの挨拶をしたんです。

明けて十六日、登は朝から部屋で横になっていた。この夜、私が帰った時、登は丁度風呂から上がったところでした。私は一応寝床に入ったのですが、感ずるところあって、肌のぬくもりのついた寝巻を登に着せてやった。そして鈴月に明朝、医者を呼ぶように手配をしておいたのですが、東の空が白んできた頃、鈴月にみとられていつ息が引取ったのか分からないような美しい最期で霊界へ帰っていったんです。

大倭へ来なければ、死ねない宿縁があったんですね。僅か四ヶ月足らずで解脱したことになります。人生の本懐だったんでしょう。

霊夢にたつ

十七日は登の埋葬準備をしなければならぬが、誰もいないから、鈴月は大きな棺桶を積んだ自転車で村中を走ったもんだから、村人達の話題になってね……。

小坂に住んでいた登の妹は、「十七日の夕方でした。一寸横になった瞬間、登が元気な姿で出てきて、『わしはもう死んだんやで。明日お葬式やが、必ず来てや。土葬やで。墓はサラ穴で砂地や。身内の者は、棺が見えないところまで土をぎせてほしい』と言ったかと思うと、姿は消えて目がさめた」そうである。妹にしてみれば、予期しない不吉なことだが、数時間たつと親戚の方から知らせきたので驚いたらしい。近くの菅谷墓地に埋葬したのですが、霊夢もピツタリの現実には親族の人達も恐れていた。

二十七日だったと思う、大阪の登の実家で告別式が行われることになり、僧侶が拝む前に是非とも私に拝んでくれと頼まれたので、朝から鈴月を連れて参った。近所の人々や大倭の信人も多く待っていたので、お祈りを始めた。台所で食事の準備をしていた例の妹がエプロンのまま何回か小走り私に近づいた時、急いで立ってゆく。もう終りに近づいた時、とうとう座って動かない。私が振向いた時、頭を下げて合掌しポロポロと涙を流している。

この姿を見た者、誰もがグツと胸を突かれる思いだったでしょう。妹が合掌するその形、片方の腕が下がって体をひねっているではないか。どうでしょう、正しくこれが生前の登そのままだったからです。膝をすって私に近づき、大声をあげて泣きながら言葉にならない言葉を出し、私の膝に顔をうずめ、しっかりと両手にかかえてから、静かに後ずさりして礼拝し、正気に戻った。泣きじやくるあたりの人々を眺めて、妹は「私が何かしたんですか」とぼつと悪い顔をして逃げるように炊事場へかけ込んだんです。

午後の告別式は土砂降りの大雨となったんです。私が帰る時は寒い星空でした。

寸 莎

第116回

小橋 重徳さん



命を大切に

今回登場してもらおう小橋重徳こばしげのりさんは、現在大倭町の自治会長を務めておられる。筆者とは偶々挨拶するだけの関係だったが、今回取材させてもらい、特に法主様への思いにふれて新鮮な感銘を受けた。

小橋さんは昭和19年12月21日に岡山県の、兵庫県との県境にある三石で三人兄妹の長男として生れた。父親が教育委員会関係の仕事をしていて、昭和20年8月には広島市に単身赴任していた。まだ二歳にもなっていない小橋さんは、8月6日に母親に背負われて父親に会いに行く途中、爆心地から三キロ以内の地点で被爆したが母子とも命は取り留めた。母親が「その時飛んでいた鳩がバタバタと落ちてきた」と話してくれたのが耳に残っているという。小学校六年の時に港町の宇野に引

越した。小学校の時から「焼き玉エ

ンジンで動く友人の父親の小さな漁船に乗って仕事の手伝いをした」といい、高校を卒業するまで続けたという。玉野高校ではテニスクラブに所属していたが、漁業の手伝いの方が鮮明に記憶に残っているようだ。

高校の時に「早稲田大学の先生が講演で『これからは化学が世界を制する』と語るのに触発されて」岡山大学で応用化学を学ぶことになった。大学卒業後、住友化学株式会社に入社して、大阪の此花区にあった春日出研究所に配属された。そこでは「生産工程の改善方法を研究する」のが仕事だった。

昭和48年に奈良市の菅野台に家を建て、翌年には沖縄出身の節子さんと新婚生活を始め、やがて三人の子どもに恵まれる。同時に、「父親の『仕事だけでなく地域社会にも貢献しなければ』という教えが心にあっ

て、菅野台の子供会を立ち上げ、子供の森への遠足や石舞台へのサイクリング、鳴川でのキャンプ等の活動を展開する。

菅野台に七年間住んだ後、子供部屋が必要になり、大倭町に移り住む。四十歳になる前に大日本住友製薬株式会社に意向して、薬や農薬の毒性の研究に従事することが退職するまでの仕事になった。

当時はサリドマイドの薬害事件の後で、薬害に対して国のガイドライン等によって厳しい規制が敷かれている時代だった。小橋さんの仕事は、主に動物実験によって新薬の毒性を検証することだった。「マウス、ラビット、犬、猿等を使って薬の毒性を調べていくのは大変な労力と時間が必要な仕事だった。他の製薬会社との新薬の開発競争が激しかったので、新しいものを早く作らねばという圧力がかかったが、あくまで厳正に審査するように努めた」という姿勢からは誠実な性格が感じられる。

法主様の言葉に出会ったのは、そんな多忙な日々の中真只中にいた時だった。当時は病気で退任した反保隆臣さんのピンチヒッターとして大倭町の自治会長を引き受けていて、ある日、瑞光院で病床にあった法主様を訪ねた。その時、法主様は「一寸話していかないか」と声をかけて

くれたという。

「それまで自分の人生のことはあまり深く考えておらず、この世での原因と結果のみを考えて生きてきた。ところが、『この世は次の世と続いている』とか『すべての命は相互に作用しあっている』ので、気を付けて大切にしていかなければ」と言われて、その言葉が重く心に突き刺さった」とその時の衝撃をふり返る。

「それまで『ネズミは単なるネズミ』としか考えず、動物実験でたくさん殺していた時期だっただけにショックだった。もっと謙虚になり命を大切にしなければと考え直し、実験動物を使うことも半減させた」とすぐに行動に結びつけた。

三年前に退職して、今は帰幽された我原利尚さんに代わって大倭町の自治会長を再度務めている。

毎朝自宅を出て大本宮の中を散歩し、拝殿の前で法主様に挨拶をし、「これまで命を粗末にしてきたことを懺悔している」のだという。

詩吟を二十年間続けていて、今はあやめ池公民館で月一、二回練習を重ねている。

これからは「地味に穏やかに生きていきたいと思うが、腹が立つことも多い。向こうから先生（法主様）が見てくれているかな」と笑う。

(聞き手 川岸田哲)

あじさい日誌

8月13日 昇ちゃんはお盆休み行事として青山法義さんに映画に連れていってもらいました。

8月14日 貴志春奈さん(フランス在住)が10数年ぶりに来島、大倭会館で1泊されました。

8月15日 太平洋戦争終戦記念日のこの日、大倭神宮で午後2時から大倭教立教開宣記念日の祭典及び月次祭が行われました。

午後、交流の家でFIWC定例委員会が行われました。

8月23日 大倭大本宮月次祭。

8月28日 東光大祭及び祖霊祭。午前11時半東方碑前でご挨拶。

午後、交流の家でFIWC定例委員会が行われました。

8月23日 大倭大本宮月次祭。

8月28日 東光大祭及び祖霊祭。午前11時半東方碑前でご挨拶。

第328回大倭会文化行事

秋の旅行のご案内

—紀州に自然と人々を訪ねる—

- 日にち** 平成27年10月25日(日)～26日(月)
- 行き先** 和歌山方面
いたきそ 伊太祈曾神社・紀三井寺
みなかたくまくす 南方熊楠顕彰館・道成寺
- 宿泊** ホテルシーモア(白浜)
- 費用** 2万7千円
- 申込** 10月10日までに湯浅芳郎へ
- 問合せ** 湯浅芳郎 電話 090-6987-5847

撈、12時から奥津齋庭で教長さんらにより祖霊祭。その間、拜殿では法主さんの平成4年8月13日の東光大祭法話(※)や田や畑で農作業される映像をDVDで見せて頂いている内に、祖霊祭を終えた教長さんをお迎えして東光大祭の祭典が行われました。(※平成21年8・9月号『おおやまと』に「宗教の根本—自分個人の心の修養」・「幸せになる近道—霊界人と交流する」として掲載分)

午後4時半から大倭会館で懇親会。弥栄おどりでご協力頂いた大倭町自治会の皆さんも参加され交流の機会となりました。

7時半からは西齋庭で今回で最後となる弥栄おどり。屋台は

ボランティアグループ あじさいの箱

書道教室作品展

—34年間の集大成として

- ◆平成27年11月1日(日)～3日(祝) 大倭会館にて
- ※1・2日はミニ・バザーもします。

ありませんでしたが櫓も提灯もあり踊り手も多く、かき氷や飲み物等がふるまわれ、賑やかに名残りを惜しみました。

9月5日 午前10時半から奈良パークホテルで邑交会が開かれました。

9月6日 大倭神宮月次祭。夜7時から大倭会館において邑倭の会が開かれました。

この日は妙月かあさん(法主様先妻)のご帰幽65年でした。大倭安宿宛では(菅原園)

8月27日 納涼祭で流し素麺を行いました。

8月26日 陶芸クラブ。焼き上がりを楽しみます。

大倭会文化講演会

山の自然とともに生きて

- 日時** 平成27年11月8日(日) 午後2時～
- 場所** 大倭大本宮拝殿
- 講師** 辻谷達雄氏

プロフィール:

昭和8年に吉野の川上村に生まれ、今年82歳。山仕事60年以上のキャリアを持つ名物男的存在。川上村に『森と水の源流館』が設立されて以来、館長を務めた(現在は名誉館長)。

「石油や原子力がなくとも、木と水さえあって体をしっかりと動かすことを知っていれば、どんな危機の時代でも生きていける」と語る。「体で覚えたことは忘れない」が信念で、培ってきた経験や知恵を次の世代に伝えていく試みとして、『山の学校・達ちゃんクラブ』を長年続けている。ハイキングや野外料理をしたりする楽しい集まりである。

※終了後、懇親会を行います。(会費千円)

(長曾根園)

8月20日(特養)誕生会で3名の方(内白寿が1名)のお祝いをしました。

8月25日(デイ)提灯を吊るしてかき氷やたこ焼き、昔懐かしい遊び等で夏祭りムード。射的が大変盛り上がりしました。

(茂毛路園)

8月17日 ボランティアさんによる今月の健康体操。

8月20日 談話室で入居者と職員で将棋やオセロを楽しみました。

10月6日(火) 午後2時より大倭神宮にて。

*月次祭(大倭神宮)

10月11日(日) 午後2時より大倭大本宮拝殿にて。

*月次祭(大倭神宮)

10月15日(木) 午後2時より大倭神宮にて。

*月次祭(大倭大本宮)

10月23日(金) 午後2時より大倭大本宮拝殿にて。

あんない